



保健医療福祉領域のNPO法人のはたらき

AMDA

—AMDA 多国籍医師団の活動—

菅波 茂

はじめに

「何故にこのような目に遭うのか」という言葉に代表される不条理は、紛争や災害によってもたらされる。AMDA (The Association of Medical Doctors of Asia) 多国籍医師団には、紛争に巻き込まれている人々や災害被災者の救援活動を目的として、AMDAの各国支部から医師を中心とした医療従事者が派遣されている。「救える命があればどこへでも」のスローガンを掲げて、世界中の被災地や紛争地で緊急医療支援活動を展開している。その活動は人道援助三原則のもとに運営されている。

三原則とは、①誰でも他人の役に立ちたい気持ちがある、②この気持ちの前には宗教、民族、文化などの壁はない、③援助を受ける側にもプライドがある、である。このプライドとは、私も社会から認められたい、必要とされたいという気持ちである。

1. 「多様性共存」への挑戦

AMDA 多国籍医師団の真の目的は何か。それは「多様性の共存」への挑戦である。すなわち、どのようにすれば物の見方や考え方が異なる人々が共栄共存できるのか。その原点は筆者が高校2

年生の夏に見た1枚の写真である。光文社発行の太平洋戦争写真集下巻の敗退篇に載っていた。はるかに日本を離れた南方戦線で、浅瀬に顔の半分を埋めて死んでいる若い日本兵だった。何故に同じ年頃の日本兵が、こんなに離れた異郷の地で死なざるを得なかったのか。思い出すたびに、今でも暑い夏の蝉のミンミンという声が耳に響く。当時の「大東亜共栄圏構想」は、アジアの多様性の共栄共存のイデオロギーだった。1919年に日本が国際連盟に提出した人種差別撤廃法案の系譜をひいている。しかし、結果として、ミャンマーのアウンサン氏やインドネシアのスカルノ氏などに袂を分かれられた。この厳しい事実の前には、教育の場における国旗・国歌論争はあまりにも軽すぎる。

2. 何故人を助けるのか

2004年10月、ジュネーブに本部があるUNHCR(国連難民高等弁務官事務所)でプレゼンテーションをした。UNHCRを支えている支援国会議の前に開催されたNGO会議の席であった。AMDA多国籍医師団の活動を紹介するつもりで万全の準備で臨んだ。しかし、会議担当官の一言で没になった。「アジアのNGOは何故に人を助けるのかを説明してほしい」という、あまりにも

本質的な要望であった。事実、UNHCRと欧米のNGOはキリスト教などの共通の精神風土があった。一晩で準備をして翌朝の会議に臨んだ。世界各地から、紛争地のNGOも参加していた。

「日本を含めてアジアのNGOは、友人のために活動をする。友人とは利益も不利益も共にする人間関係である。友人が不利益を被っていたら、これを助けるのは友人としての責務である。通常なら困難に巻き込まれるのを避けるのに、なぜわざわざ困難の解決を共にするのか。それは困難を解決する過程において友人に自分にないすばらしい点を見つけたら尊敬の念が起こる。どんなに困難が厳しくなっても、友人が逃げないとわかった時に信頼の念が起こる。この尊敬と信頼にもとづいた新しい人間関係が、アジアの持つ多宗教、多民族、多文化などの多様性を克服して共栄共存を可能にする。だから、アジアの人は友人のために助けに入るのだ。ちなみに、友人関係から、困難を共にする人間関係であるパートナーになることを相互扶助という」と説明した。

会場のNGOからたくさん質問があった。「どうしたら友人やパートナーが得られるのか」と。「友人になるのは簡単だ。今すぐにでもなれる。ただし、困難を共にするパートナーになるのは気をつけたほうがよい。もし、途中であなたが逃げたら、私はあなたを軽蔑し、私たちの友人関係は粉々になるから」と応えた。会議終了後に担当官が筆者に言った。「ありがとう。初めての本音の会議だった。来年も参加してほしい」と。

3. スマトラ沖地震・津波にて

2004年12月26日に200年に1度といわれた大災害が発生した。スマトラ沖地震・津波である。

自然の不条理を嘆くべきか。この津波の被害は甚大であった。22万人以上の命が一瞬に失われた。被災者の数は天文学的である。つい数分前まで元気に語り合った家族や友人、営々と家族が住みつけてきた家、そして隣近所仲良く付合ってきた街が瞬時にこの世から消えてしまった。生命

の維持に必要な水や食糧が手に入らない。津波に巻き込まれた時の打ち傷や擦り傷が化膿して重症化しても治療が受けられない。人々は嘆き悲しんだ。「神々はどこに行ったのか、われわれを見捨てたのか」と。この大災害は20世紀の戦争に代わって、21世紀は災害により多くの人々が命を失う悲しい序曲だったのかもしれない。

このような大規模広範囲な災害に対し、AMDA国際ネットワークのうち、9カ国の支部と岡山の本部の10カ国が共同して緊急救援活動を実施したことは、1984年に発足して以来初めてであった。3つの被災国に10カ国が協力して、延べ100人以上のスタッフを送りこんだ。インドネシアのバンダ・アチェにはインドネシア、台湾、カンボジア、カナダの支部と日本の本部から、スリランカの北部、東部そして南部の3地域にはスリランカ、カナダ、ニュージーランド支部と日本の本部から、インドのチェンナイにはインド、ネパール、バングラデシュの支部と日本の本部からのチームがAMDA多国籍医師団として緊急救援活動を実施した。宗教、民族そして文化は異なっても、人の役に立ちたい気持ちに変わりはないことをしみじみと再確認した。

国際社会の救援活動に先駆けて、AMDAはインドネシアとスリランカでは27日から、そしてインドでは29日から緊急救援活動を開始した。これを可能にしたのは、日本の本部と各支部との日頃の活動で醸成した信頼関係であった。信頼関係は、電話1本による緊急救援活動体制を動かす。その精神は「困った時はお互い様」の相互扶助と、「現地のことには現地に任せる」という現地主導である。相互扶助の精神は援助を受ける側のプライドを傷つけない。共に苦勞する過程で尊敬と信頼を築く精神でもある。現地主導は、現地支部の価値判断と豊富な人脈にもとづいた迅速な活動を保証してくれた。そして多国籍ネットワークは大量のスタッフの投入を可能にした。さらに、IT通信技術の発達がなければ、多国籍チームにとって情報の共有とコンセンサス形成による共同作業は不可能だった。

大規模な多国籍医師団の投入と活動には大量の資金が必要となる。しかし、緊急救援活動の募金は常に後からくる。ただし、この時には津波発生2カ月前の10月にいただいた第2回沖縄平和賞副賞の1,000万円があったので、最初からAMDA多国籍医師団を大規模に展開することが可能になった。この誌面を借りて、沖縄県には改めて感謝申し上げたい。

4. ミャンマーの大型サイクロン被害

2008年5月2日の夜から3日にかけて、大型サイクロンがミャンマー連邦中・南部を直撃した。政府の発表によると、死者・行方不明者数は13万人以上である。被災者は160~250万人に上ると推定されている。60年に1度の大災害である。強烈な雨と風に街路樹は倒れ、家の屋根は吹き飛んだ。甚大な社会インフラ被害が発生。ヤンゴン全域で停電し、電話は不通になった。医療機関は開院しているが、バス料金は20倍に高騰し、路線回数は1/2に減っているのでアクセスが悪く通えない。政府機関は資金、医薬品、ブルーシート、毛布、夏服、インスタント食品などが必要であると発表した。被災者は親類宅や僧院（パコダ）に身を寄せていた。

AMDAは5月10日よりヤンゴン管区クンジャンゴン市において医療支援活動を開始した。11日よりミャンマー人スタッフで構成されたAMDA医療チーム（計10人：医師3人、補助医師1人、看護師1人、業務調整員1人、保健補助員3人、ロジ補助員1人）が、保健当局スタッフ2人および地元住民ボランティアと共に巡回診療を開始した。1日あたりの平均患者数は250人である。飲み水の不足のために、乳幼児の下痢などの消化器疾患が多い。加えて、不安などの心的外傷の患者が多かった。巡回診療の医療スタッフは、中部乾燥地域事業（マングレー管区メッティラ県、ニャンウー県、マグウェ管区パコク県）で1995年から実施している母子保健プロジェクトに従事していた。ミャンマー政府は海外からの救

援医療チームを拒否していたが、AMDAは12年間の活動に対する政府の信頼とローカルの医療スタッフの活用によりサイクロン被災者救援医療活動を続けている。

「緊急人道支援とともに民主化の推進を」とは某新聞社の社説である。災害のどさくさにまぎれた政治活動のメッセージである。ミャンマー政府の置かれている国際社会での立場は微妙である。ミャンマーの英国統治下60年の植民地の歴史、民主主義の成立する社会的条件、脱貧困と民主主義との優先順位、民族の自決を原則とする近代国家における多民族社会、アウンサンスーチさんの夫が英国人などの難解な5次元連立方程式を国際社会は解く必要がある。緊急人道支援時のメッセージは如何に多くの被災者の救援に役立つかが肝要である。災害時の「民主化の推進」のメッセージはマイナス以外の何ものでもなかった。5次元連立方程式の答えを不能にただけである。

援助を受ける側にもプライドがある。サイクロン被災者救援の最大のメッセージは「連帯感」である。ミャンマー人には親日家が多い。日本人にも親ミャンマー家が多い。世界のどの国よりも日本人とミャンマー人の連帯感が高いといえる。現在の日本にとって国益とは親日である。日本政府は国際社会におけるサイクロン被災者救援活動のイニシアチブを取るべきだった。何故なら、両国民に連帯感が存在するからである。1990年の湾岸戦争の時に「顔が見えない日本」といわれた屈辱を繰り返してはいけない。顔とはメッセージである。「緊急人道支援とともに民主化の推進を」ではなく、「緊急人道支援とともに連帯感の推進を」が5次元連立方程式の答えである。

5. 四川省大地震

2008年5月12日、中華人民共和国四川省で大地震が発生した。死者が6万5,000人、負傷者36万人、行方不明者2万3,000人以上である。わずか10日前に発生したミャンマー・サイクロン死者と被災者の数を合わせれば、スマトラ沖地

震・津波と同規模である。200年に1度といわれる規模の大災害が4年後に再びアジアを襲ったことになる。四川省の被災現場は残酷だった。瓦礫の下に埋もれている死体の腐敗による伝染性疾患の発生と流行を防ぐために、そのまま遺体を埋めて防疫体制に入らざるを得なかった。さらに、土砂によるダム決壊の恐れが救援活動をたびたび頓挫させた。

地元医療専門家（外科医1人、看護師2人、調整員1人）によるチームを13日編成し、徳陽市スーフアン避難所で14日支援活動を開始した。15日にはAMDA台湾支部派遣医療チームが雲南省と上海在住医療関係者と共に成都に飛行機で入った。整形外科医と外科医は四川省大学西華病院や四川省中西医结合医院（四川省中医薬科学院付属病院）で、骨折や打撲の被災者に整形外科手術などを実施した。精神神経科医は四川省中西医结合医院で、被災者の精神的トラウマの治療を行った。17日には日本の本部からの調整員1人がAMDA台湾チームに合流した。中国各地からの救援医療チームが被災地に参加し、海外からの医療チームの役割がほぼ終了した5月30日に、AMDA台湾チームは延べ30人の医療従事者派遣の実績のもとに撤収した。

AMDA多国籍医師団が四川省被災者救援医療活動を5月14日から開始できたのには理由がある。1996年2月の雲南大地震被災者救援活動と2・3月の四川省・青海省雪害被災者救援活動の時の人間関係が、四川省に保存されていたからである。

AMDAは雲南省への医療チーム派遣と共に、医薬品や生活支援物資を満載した中華民航のチャーター機を、岡山空港から雲南省の省都である昆明に飛ばした。中国政府から問われた。「何故にAMDAはわれわれを支援するのか。政治的目的があるのではないかと。」「1995年1月17日に発生した阪神大震災の時に、中国政府は神戸の被災者に支援をしてきたのではないかと。その時の返礼だ。困ったときはお互いさまの相互扶助である」の返事に着陸許可が出た。

6. 不言実行の恐ろしさ

「何故にこのような目に遭うのか」に代表される不条理の被災者は、支援を受ける時に尋ねる。「何故にあなたは私を助けるのか」と。国際社会の有言実行の有言とは「何故にあなたを私は助けるのか」のメッセージであり、「被災者に対する悲しみの共鳴」のメッセージである。実行とは救援であり支援である。一番評価されるのは有言実行である。次は有言不実行である。その次は不言不実行である。最悪は不言実行である。何故なら、「説明なき親切」である不言実行は、相手に不安感と警戒感を持たせるだけだからである。

ミャンマー・サイクロンと四川省大地震の救援活動に、またもや日本人の特性が顕著に出た。それは不言実行を犯したことである。何故に日本政府は、間接民主主義のトップである首相の閣議の場での黙祷とメッセージをNHKなどのメディアをとおして世界中に繰り返して流さなかったのか。何故に日本のメディアは、ミャンマーや中国との姉妹都市縁組をしている自治体に黙祷とメッセージを呼びかけなかったのか。何故にメッセージや黙祷なき支援活動・支援物質提供や自衛隊機派遣の可能性のみを大々的に報じたのか。不言実行の恐ろしさを知らなかったのか。政府とメディアは「顔の見えない日本」からの教訓を生かされてないのではないかと。あの時に米軍を主とする多国籍軍に提供した1兆4,000億円の血税は何だったのか。「男は黙ってサッポロビール」のコーマercialが受けるのは、日本の特殊な精神風土であることを明記しておきたい。

7. NGOとGO

NGO（非政府）とGO（政府）の決定的な違いを説明しておきたい。それは正統性と正当性の違いである。正統性とは存在の証明である。正当性とは行為の是非である。GOには正統性があるがNGOには正統性なく正当性があるのみである。具体的に言えば、数百億円の予算を誇る世界最大

のNGOでも法の制定は不可能であるが、わずかな数百人の村でも法の制定ができる事実である。NGOは万能ではない。NGOは自らの限界も知っておくべきである。

8. AMDAのこれから

AMDAは2006年10月、赤十字国際委員会に代表されるような、国連経済社会理事会総合協議資格団として認められた。137番目のNGOであり、ちなみに、国連加盟国の数は192である。そ

れだけ取得が困難な総合協議資格である。AMDAの予算は年間5億円程度である。他の団体は大体3桁の予算規模である。しかし、国連および国際機関に対する政策提言権は同じである。アジア、アフリカそして中南米などの30カ国の支部および45の姉妹団体と、「相互扶助」を基盤とした、世界平和に寄与できる政策提言を積極的行なっていきたいと考えている。「SOGO-FUJO」が英語辞典に記載されれば、AMDAの文化的使命は達成されたと思っている。

よりよい消化器集団検診のために

—21世紀へのメッセージをこめて—

●監修●有賀槐三
●編著●荒川泰行
岩崎有良, 小野良樹

本書は集検に携わる医師、放射線技師、保健婦、事務担当者、また、消化器集団検診に興味を持っている方々に活用していただき、消化器集団検診の研究と検診業務の実地に役立てていただきたいと思います。総論ではいろいろな立場からみた集検の課題と対策などを記述、各論では食道、胃、大腸、肝胆膵の疫学、現状と問題点、集検間隔など、また集検で発見された興味ある症例などを提示して説明をしてあります。

528頁・B5判 定価 13,125円 (本体 12,500円+税5%) 978-4-7644-0029-0